

探偵作家

—福原成雄の『日本庭園を世界で作る』(学芸出版社、2007年)を読む—

山 縣 熙

郷里、和歌山の田舎家を出て50年以上が経つ。その家には確かに庭があった。松や榎それに梅などが植わっていて、灯笼や空堀もあった。十代の終りに東京に出て10年、当時の学生の多くは間借りの下宿生活だった。10年の間に3度引越しをした。間貸しをする位の大家である、広くはないが植栽のある空間があった。当時、東京から帰省する途中、京都駅で降りては大学に通っていた先輩と、寺々の庭をみて廻った。中でも岩倉にある円通寺の庭が私の好みだった。

それから3年余のフランスへの留学がある。1969年6月、前年の五月革命の翌年であった。最初は語学研修を受けるため、リヨンに行った。そこにはle Parc Tête d'Orという公園があった。訳して「金頭公園」。その名前にはそれなりの由来があったのだろうが、当時も今も、そうした故事来歴には疎い上に関心が無い。関心が無いから結果として疎いのかも知れない。だがこの公園のことで、今もはっきりと覚えていることがある。すでに現地にいる先輩留学生の教えてくれた、日本人にだけ通じるこの公園の名前に関する駄洒落である。すぐには理解できなかった。「金の頭」すなわち「キンのアタマ」公園の謂である。

三ヶ月間の語学研修を終え、パリに戻ったのは九月だった。パリの住居は、パリ南部の「大学都市」とよばれている、公園ともいえる広い敷地内に点在する、各国の留学生会館の一つ、「日本館」であった。大学都市の日本館寄りの門扉を出、道路を隔てたところに、「モンスリー公園」と呼ばれる公園があった。その公園は、フランスではイギリス式庭園と呼ばれている庭

園をもつ公園で、フランスに多くみられる、幾何学的庭園ではなかった。

モンスリー公園はフランス語でも「公園 (parc)」と呼ばれているが、日本では公園と呼び慣わされている「ルクサンブール公園」とか「チュイルリー公園」とかは、フランス語名は、jardin (庭園) である。

およそ三年半の留学を終え、帰国した私は神戸大学に職を得た。以来40年近く神戸に住んでいる。神戸でも一度引越しをしたが、共にいわゆる集合住宅であり、庭の類とは全く縁はない。

庭・公園・庭園、これらの一群を形成する用語間に、どれほどまでに明確な区別があるのだろうか。あるいはまたそれらはどう共通しているのだろうか。こうした全く初歩的な疑問を抱くほど、私は「庭園」に関して、ずぶの素人である。

その素人の私が、Newsweek誌日本版、2006.10.18日号の特集「世界が尊敬する日本人」に取り上げられてさえいる作庭家福原成雄の著作の書評を書くことになったのである。

大阪芸術大学の同僚福原成雄との出会いは何年前になるのだろうか。7、8年にはなるだろう。知り合った当初、私は彼の仕事の内容を具体的には知らなかった。知らなかっただけではない、正直、その仕事に余り関心をもつことはなかった。だから、いつだったか、帰りに一緒になった折に、バスでの席が隣になった彼が、お洒落な鞆から取り出した絵図面のコピーを見せてくれ、これは最近みつかった、知恩院の庭の、完成

当初からの変遷の絵図面だと、興奮気味にいろいろと語り説明してくれても、いわゆる「実証主義」に関しては距離を置いてしまう性癖から、心の中では、だからといってそれがどうしたというのか、とそう思ってさえいた。しかしその思いは、彼自身の人柄への、個人的信頼や好意を少しも減じることはなかった。

それから間もなくのことであった。彼は、先に興奮して話してくれた知恩院の調査現場を、数人の仲間と一緒に招待し、案内する機会をつくってくれ、調査の結果明らかになった、いろいろな事象を説明してもらった。それは正しく私の旨を開くものであった。それまでは、建物や襖絵そして目の庭園や池泉に目はいっても、その庭や池が、歴史の流れの中で、つまりはその時々々の権勢の盛衰の中で、人の生と同じく様々に変貌してきたのだなどは、考えてもみなかった。庭や池は常に変わらぬものとして、そこにそのようになり続けると、少し考えれば、そんなことはありえないということは自明のことなのに、どこかでそう考えている自分がいた。だが彼はその時こう言った。知恩院小方丈の北池は、当初はもっと広がったのだと、徳川家康、秀忠、家光の三代の霊を祀っている権現堂の御廟がつけられ、参詣者が増えると共に、通路を広めるべく、池は小さくされたのだと。それは、池庭をめぐるサスペンスドラマを聞いているようにさえ私には思われた。そこでの彼は庭を偵い、探る探偵、つまりは探庭家であった。

この折の経験が、私が彼の仕事に関心をもつ切っ掛けとなり、その結果がこの書評へと導かれることにもなる。

本書は本文六章と、前書きに相当する大阪芸術大学環境デザイン学科学科長狩野忠正教授の「親和する庭」と、後書きに相当する著者自身の「日本庭園を世界で作る」や「謝辞」それに「庭園施設解説表」や「イギリス・アイルランドの日本庭園」一覧表等から成る。

本文六章は次のような各章をもつ。

- 第1章 英国王立キュー植物園内日本庭園
—作庭後の維持管理を見据えて
- 第2章 中国長春市日中友好会館日本庭園
—現場の交流、技術の交流
- 第3章 タトンパーク内日本庭園
—ナショナルトラストとの調査から設計へ
- 第4章 チェルシーフラワーショー出展日本庭園
—最優秀賞受賞とウェールズ国立植物園への移築
- 第5章 ロスチャイルド美術館内日本庭園
—原作庭者の夢を甦らせる
- 第6章 英国王立園芸協会ウィズリーガーデン内ロックガーデン
—日本庭園からジャパニーズランドスケープへ

各章とも、本書の著者が何らかの形で関わった、作庭あるいは改修の、それぞれの課程の報告であり、2章の中国、5章のフランスを除いて、他は全て、イギリスでのものである。

ここでは私的に関心があると共に、本書の核心を明らかにすると思われる二つの章を取り上げ論じると共に、本書中に繰り返し述べられる章句を取り上げ、庭について語ることを通して見えてくる著者の考えあるいは世界観を明らかにすることを試みる。

まず取り上げるのは「タトンパーク内日本庭園」(図1)というタイトルをもつ第3章である。

この章において、かつて知恩院を案内してくれた折に、私が福原成雄の内に見出した、探庭作家の姿が最もよく現われ出ている。

本章は1999年夏に、「学校法人塚本学院海外研修計画」に基づき行われた「国際交流に果たす日本庭園の意義」と題する海外調査の結果報告と、その結果を踏まえて行われた日本庭園修復工事の経過報告とからな



図1 タトンパーク内日本庭園中心部（同書より）



図2 チェルシーフラワーショー出展日本庭園枯山水全景（同書より）

る。調査の対象はイングランド北部マンチェスター近郊にある「タトンパーク (Tatton Park)」(ニューズ・ウィーク誌ではタットン・パークと促音になっているが、福原成雄の表記に従った)である。

海外で日本式庭園が作られるようになったのは、1873年のウィーン博覧会以来のことである、という。タトンパーク内の日本式庭園もまた、1910年(明治43年)ロンドンで開催された日英博覧会の日本庭園を見学した、タトン家三代目のエガートン男爵が、日本人職人8人を招き作庭したものとされている。「作庭当初は中国風のスツール等が置かれており、(略)中国的なもの、日本的なものがミックスされた東洋趣味によってこの庭園は作られていた」と推定する著者は、かくて「作庭当初の状況を写真、現存する庭園施設等からよく調べ、その価値を明らかにすることが今回の調査の大きな目的の一つである」(同書80頁)と確信するに到る。

1989年頃に、同公園のヘッドガーデナーが入手したという工事中の写真や言い伝えでは、1910年頃の作庭に際し、8人の日本人が関与したことになっているが、工事図面や工事記録には、それを証明する記録等はなく、その真偽は不明である、と探庭家福原成雄は調査開始当初に抱いた所感や推定に疑いを持ち始める。様々な疑問点を前に、探庭作家福原成雄は改めて次のような調査方法と目的を設定する。

「タトンパーク内図書館や関係施設で、日本に関する書籍等を探すと共に、タトンパークのスタッフ・来園者に対してアンケート調査を行う。」(同82頁)

続いて具体的な個別方法と目的とが述べられている(同所)

例えば「1913年頃の工事写真および完成写真を克明に調べ、現況と比較することによって、建設当初からどのように庭園が変化したかを調べるとともに、誰が工事をしたのか、工法は(いかなるものか)、消失したものは何かを明らかに」(同84頁)しようとする。

また例えば発見した建築図面や庭園施設図面を手に、「図面の描き方(寸法、表記)から、一連の庭園施設が日本人の手によるものではなく、英国人によって設計されたものであった」(同88頁)ことが明らかになったりもする。

また「滝石組、流れ石組、池護岸石組」の実測調査においては、それら石組が、日本的ではないことが指摘されることになる(同90頁)

このようにして、探庭作家福原成雄は次のように結論する。「現在の状況、現場調査、資料から、本庭園はおそらく日本庭園の本と、日英博覧会の印象から設計されたと考えられる。さらに、日本人技術者が訪れたかどうかは定かではないが、神社の建築には明らかに日本人が関係している。」(同92頁)

この結論に到るまでの、神社屋根裏の木材に書き込まれた日本語割付の発見とそれに続く推理等、実際の体験に基づく推理・推測がもつ論理性には説得力があり、探偵小説を読み進めているかのような感がする。探偵・探庭作家福原成雄の誕生である。

探庭作家福原成雄はしかしまた優れた作庭家でもある。探庭家としての彼がその固有の推理が導く結論に基づき、またそれを実証すべく、その庭園の修復を試みることにより、作庭家となる。

作庭家としての福原成雄は他方、きわめてバランス感覚の優れた作家でもある。

先に指摘したように、探庭家として手許の資料や目前の庭園を手掛りに、論理的推理の力を遺憾無く發揮してみせた福原成雄は、作庭家としては、その経験に裏打ちされた自らの感性を信じ、それに従い、実に柔軟に状況に対処していく。

タトンパーク内日本庭園に、「日本的なもの、と英国的なものが」うまく調和していることを見抜いた彼は、「日本の手法と英国の手法を組み合わせること」にする。「調査から判明した英国的な手法は積極的に用い、調査でわからなかった部分については、できる

限り、残されている庭園施設と調和するように日本の造園手法によって復元した。」(同96頁)。それは「現在の状態を日本庭園として鑑賞しうるようにする修復設計と、建設当初に存在した施設等を元の状態にする復元設計」(同97頁)という二つの設計をバランスよく利用するものであった。

読み進めるに従い、読み手の気が遠くなってくるような修復・復元の工事を経て(同書98頁～102頁)、終了した「タトンパーク内日本庭園修復プロジェクト」を前に、探庭家にして作庭家である福原成雄は次のような感概を記す。

「今後、この庭園を通して英国と日本の各種の文化交流が行われ、この日本庭園が英国における価値ある庭園としてますます輝きを増し、日英友好の絆をさらに深め、人的交流の役割を担うことと確信している。」(同105頁)

このまるで、政府の公式見解発表のような文章を、このように彼に書かしめる確信の力こそが、探庭家にして作庭家福原成雄の活動を根幹で支えているエネルギーでもある。

このような福原成雄を、先に挙げたニューズ・ウィーク誌が「世界が尊敬する日本人」「技と勇気であつと言わせた知られざるヒーローたち」の一人として、取り上げたのは当然のことでもある。そのタイトルは「日本庭園の美に恋をして」である。

ニューズ・ウィークの記事はこのように始まる。「園芸の世界で最高の権威と伝統を誇るイギリスのチェルシー・フラワーショー。チェルシーの最優秀ガーデン賞は造園家にとって最高の栄誉とされる。福原成雄は01年にその栄誉に俗した。」(42頁)

本書の第4章「チェルシーフラワーショー出展日本庭園」はその授賞に到るまでの、作庭家福原成雄の戦果報告書でもある。

ニューズ・ウィーク誌の記事にもみるように、

「チェルシーフラワーショー出展日本庭園」(図2)は、探庭家にして作庭家福原成雄の集大成ともいえる作品である。

2000年1月、在英日本大使館より、2001年5月から開催される「大型日本文化紹介行事『ジャパン2001』参加事業」として日本庭園出展の打診を受けた福原成雄は「海外で日本庭園文化を紹介することは、庭園を通して日本人の自然に対する慈しみと、自然を愛でる自然観を知ってもらえる好機である。」(同108頁)と考え、参加を決める。

福原成雄によれば、「日本庭園の様式は、自然風景式を基本に『池泉式』『枯山水』『露地』に大別される」ことになる。そしてこのショーに出展するには、「それら三つの様式とその変遷を紹介することが、わが国の庭園の大要を表現するにふさわしく、かつ理解されやすいのではないか」(同111頁)と判断するに到る。このようにここでも作庭家福原成雄のバランス感覚が見事に発揮されている。

かくて「枯山水」を中心に東西の左右に「池泉式」「露地」を配することで、「三つの部分に分かれてはいるものの、まったく個別の存在でなく、各庭がそれぞれの様式を踏まえ、特色を有しながらも、相互に調和し全体として一つの庭園」(同113頁)を形成することを目標とする。そのため「相互の庭の領域界部分では『遮り』『見え隠れ』や『見立て』の配置等の技法を用いることにより、双互間の違和感を払拭し、調和・一体化したもの」(同所)を考案・設計する。ここでもこの設計戦術を可能にしたのは、作庭家福原成雄のバランス感覚であった。

また先に指摘した探庭家の側面は、今回は作庭の材料探しとして発揮される。「石材、樹木材料探しに英国を駆けめぐり、高木樹木探しには日帰りでオランダにも出かけた。」(同117頁)と福原成雄は述べている。

過日、四国香川県牟礼町のイサム・ノグチ庭園美術館を訪れる機会があった。そこで感じたことは、作家

イサム・ノグチがいかに「石との出会い」を求め、その出会いを大事にしていたかということであった。そこ、イサム・ノグチの庭園美術館では、あらゆる石が、時と所を得、自らの生を生きていた。牟礼町産の庵治石との出会いこそが代表作「エナジー・ヴォイド」を可能にしたともいえる。そこではイサム・ノグチの内なる声と庵治石の外なる声との共同作業がもの見事に和声を形成し、完成成就している。探庭家にして作庭家の福原成雄もまた、石と樹を求めて、各地を探しまわり、偵ったにちがいない。

ニュース・ウィーク誌の引用ですでに明らかなように、2001年5月21日、この日本庭園は最優秀賞を受賞することになり、その「受賞を機に、ウェールズ国立植物園に移築され、永久保存されることになった。」(122頁)

福原成雄は本章を次のように結ぶ。

「2001年10月9日、美しいウェールズの風景の中に初めての日本庭園が完成し、公開された。」「本庭園が表現する日本の文化、精神、思想が英国の人々の心に届き、調和と安らぎ、平和を日本庭園の中に見出す契機になれば幸いに思う。」(同126頁)

「日本庭園を世界で作る」という後書きにも相当する文章において、福原成雄は「作庭を通して、私は、そのすべてにかかわる。それが私の生きがいである。」(同180頁)と書くと共に、「庭を通して、言葉の違う多くの仲間ができた。庭は、言葉を必要としない。黙っていてもわかりあえる。」(同所)と書く。このとき、作庭家福原成雄は極めてリアリストである。しかしその彼がまた次のような文章を書く。「作庭は決して一人ではできない。多くの仲間がいてできあがる。そして、完成は、終わりではない。5年、10年、もっと長い年月を経て、庭は作られていくのである。」(同所)と。つまり作庭家は単純なリアリストではありえない、否、純粹にして単純なリアリストなどおそらく

はどこにも存在しないのだろう。

作庭家福原成雄はまた探庭家でもある。作庭のすべてにかかわることを「私の生きがいである」という先に引用した文章にすぐ続いて、探庭家福原成雄は「もう一つ、材料探しも生きがいであると言える。庭作りは素材探しの旅であるのかもしれない。」(同所)と、イデアリストの側面を覗かせる。

カルダーという彫刻家がいる。カルダーの作品をみていると、材料探しの極限を考えさせられる。どこをどう探しても、気に入った材料がみつからない時、人は自らが創造主になるしかないと、カルダーの作品は私にそうした妄想を抱かせる。自分の気に入った樹木や石材がみつからない場合に、探庭家福原成雄ならどうするのだろうか。

また同じ後書の、ほぼ同じ所で、福原成雄は次のように自問自答する。「なぜ、人は庭を作るのだろうか、解けない謎である。いつもそのことを問い続けているように思う。各国の庭園を旅するのも、その答えを捜し求めているからである。」(同所)

ここでも福原成雄はバランスよく、リアリストとイデアリストの間を往還する。そして「ずぶの素人」であるとも断りをした、冒頭の私の問いへと還帰する。

パークもガーデンもジャルダンも、ニュアンスの違いこそあれ、土地を囲い込むことを意味している点に変わりはない。福原成雄は、「ガーデンからランドスケープへ」と言ってもいる。分かる気もするが市立や県立の公園が、国立公園や自然公園になっただけのような気もしないではない。

いつの日か、作庭家としての彼が、境界のない庭をつくり(そんな庭が可能としての話だが)、探庭家としての彼が、その庭に適した樹や石の材料を探し求め、探しあぐねた末に、カルダーのような作品を設置し、植えることを私は夢想する。